

# 令和5年度ときめき俳句大会入賞作品一覧

## 【大賞】

二六六 頼らるる事を励みに大根干す

清水里子

≪講評≫ 木暮 陶句郎 先生

荒縄で結わえて大根を干す作業は体力と熟練を要する。「あなたでなくては」と頼られることを励みに今年も大根を干す作者である。

八一六 母の日や握り返せぬ手を握る

吉原道子

≪講評≫ 猿渡 道子 先生

母の手を摩り確と握るが今の母には握り返す力はない。自分の為に何でもして呉れたあの頼もしい手を思うと胸に迫るものがある。親子の永遠の絆、恩愛の一句である。

## 【特賞】

一五七 墓洗ふ記憶のなかの父母という

龍子

≪講評≫ 今井 妙 先生

私の父は戦死でした。戦地に行く前の一枚の写真。実家の長押しに埃を被つてあります。この句作者をうらやましく思い又故郷を思い出させてくれ、すばらしい句です。

二〇九 おしやれして花野へとこぐ車椅子

糸井爽子

≪講評≫ 原田 要三 先生

花野へ行く作者の思いが、「おしやれして」と「こぐ車椅子」と詠まれている。身だしなみに気を使うことと「こぐ」という花野へ向う自らの意志の表現に魅かれた。

四〇九 身に入むや車椅子押す娘の白髪

高橋須美子

≪講評≫ 原田 要三 先生

車椅子を頼る生活。身のまわりの世話をしてくれている娘さんに、白髪のあることに気づいた。苦労を掛けていることへの気遣い、共に、老いてきたことへの感慨。

【特賞】

五四六 生き抜きし昭和はるかに稲架を組む

星野平一

〈講評〉 小林 敏朗 先生

懸命に米づくりにした昭和の世を振り返りつつ今は少し楽になった生活の中で稲掛け、立派な米の収穫に携わっている様子がしっかりと窺える。

六五三 生くるとは明日に会ふこと露の臺

佐藤強

〈講評〉 木暮 陶句郎 先生

「上五中七に哲学的な説得力がある。早春の固い土を割って出てくる「露の臺」に託された前向きな志である。」

【秀作】

七 土塊のほぐるごとく物芽出づ

至孝

一六四 眉引きて我が身励ます初鏡

池畠敏子

一七〇 争いの無き世を望み春を待つ

番場正夫

一七八 この先は何処を歩くも恵方道

稲葉浅光

三六九 漆塗る刷毛は人の毛寒に入る

長岡和恵

三七五 八方に山ある暮らし吊し柿

山崎千鶴子

四〇八 雑木山芽吹きて影のあふれだす

岡田秀子

五〇二 赤城山大きく晴れて鳥帰る

田島裕子

五三六 つつがなき米寿の夫と秋刀魚食む

小貫榮子

五七七 父の手を祖父の手を知る火鉢かな

中島弘子

六三三 指先を風があやつる風の盆

猪野せつ子

六四五 年惜しむ九十年のたつきただ愛し

中西好江

七三八 十年は生きたし五年日記買ふ

細井寿男

【佳作】

- |     |                  |       |
|-----|------------------|-------|
| 一五  | 雲の峰再出發の八十路かな     | 椎名ヒロ子 |
| 二七  | 悠々と一人句作の炬燵かな     | 遠藤たかえ |
| 三一  | 八月や学び直しの世界地図     | 岡田ふじ子 |
| 五一  | グランドに仲間の笑顔秋澄みぬ   | 鈴木清江  |
| 六一  | いちにちのいのちいきいき日日草  | 相澤礼子  |
| 六七  | ビオトープ児等叫びつつメダカ追う | 西眺    |
| 一三四 | 夜更けまで踊り追いかけて風の盆  | 岡田文子  |
| 一四五 | 秋耕や父の言葉を励みとす     | 笠原正士  |
| 一六三 | 何ひとつ欲しい物なし日向ぼこ   | 池島敏子  |
| 二〇七 | 秋彼岸いつしか母の歳をこえ    | 森田絹代  |
| 二四九 | 枯葉追う児を追う風に追い越され  | 由木実枝  |
| 二五五 | ラムネ瓶吹いて昭和へ帰りけり   | 飯島慶子  |
| 四一九 | 寒風や竹刀打ち分け静と動     | 春山泉   |
| 四三四 | 言の葉を拾ひ集めて冬ごもり    | 田村フミ江 |
| 四五七 | 素っ気なき夫の返事や風花す    | 佐藤栄子  |
| 五一四 | 声張りに誤嚥の予防百舌喋る    | 柘野良枝  |
| 五二六 | 花吹雪一瞬わが子を見失ふ     | 横堀美喜  |
| 六六五 | 惜春や片方残るイヤリング     | 清水檀   |
| 七四一 | 良き町に住み半世紀花馬酔木    | 堀越明子  |
| 七四四 | 両手に杖持ちて一礼初詣      | 中井良雄  |
| 七七三 | 葱畑畝に日差しのあふれぬし    | 村上節子  |
| 八〇〇 | 雄大な赤城嶺眺む村小春      | 柴崎登起子 |
| 八〇五 | 透明てふ色一つ足し冬の水     | 堺美典   |

【群馬県長寿社会づくり財団理事長賞】（最高齢者男女各1名）

〈男性〉

五四五 長寿の世みな艶やかに龍の玉 星野平一 97歳  
五四六 生き抜きし昭和はるかに稲架を組む

〈女性〉

一八五 望の夜や終活を経て白寿くる 磯つね 99歳  
一八六 「大丈夫」毎夜娘が問う冬の風呂

【ときめき賞】（理事長賞を除く年齢上位者男女各5名）

〈男性〉

六二九 遠榛名暮色に染まる木守柿 南風子 96歳  
六三〇 谷川岳三段染めの紅葉かな  
六七 ビオトープ児等叫びつつメダカ追う 西眺 95歳  
六八 柿熟れる残照峽の村を染め 岩田繁 94歳  
一四三 朝日浴び生を確かむ翁かな  
一四四 朝焼や大気を染めて美の極致 可英 92歳  
五九三 空高く微かな風に紅葉散る  
五九四 落ち葉踏む音賑やかに暮れ間近か  
六二五 一病を抱える齡冬至風呂 中林徹 91歳  
六二六 雀の子遙かに一茶の声のして

〈女性〉

一四七 敬老日まづは挨拶喜べり 笠原照代 98歳  
一四八 新米や家族揃ってなお美味し  
四三 納屋涼し亡夫手書きの農日記 城田鶴代 97歳  
四四 糶田に杭打つ音のして淋し  
一〇一 九十路齒応確と梨を食ぶ 久岡千代子 97歳  
一〇二 爽やかや百歩足踏日課とす  
一八七 釈迦像のお顔散策蟻孤独 黒田清子 97歳  
一八八 遠花火音遅れくる終の宿  
六八三 孫娘暮のボーナス声弾む 足立静枝 97歳  
六八四 流れゆく紺碧の空雲なびく